



Title	青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2011年度)
Author(s)	高瀬, 克範
Citation	北方人文研究, 5, 33-39
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49268
Type	bulletin (other)
Note	研究ノート
File Information	03journal05-takase.pdf



[Instructions for use](#)

〈研究ノート〉

青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2011年度）

高瀬克範

北海道大学大学院文学研究科

はじめに

青森県むつ市江豚沢遺跡（北緯41° 11′ 46、東経141° 16′ 32）は、むつ市街地から南へ約12kmの近川集落北西側、奥内字竹立4-1ほかに所在する（第1図）。遺跡は、最終間氷期（OISステージ5e）に形成された海成段丘mT5e（山崎2001）上に立地し、現況は畑、荒地、植林地などである。台地上の平坦面（標高20～21m）から奥内川とその支谷にむかう傾斜面、浅い埋没谷などの微地形が包蔵地内に含まれている。

本遺跡は、1950年に中島全二によって注意され、同氏の採集土器を江坂輝弥（1953）が大洞A'式として紹介したのが文献上の初出である。1952年には、江坂によって基本層序や遺物の散布状況などが調査され、1966年には下北史談会の橋善光・山本一雄らによって本格的な発掘調査が実施された（橋・山本1967）。その結果、縄文時代終末期からその直後の土器が多数出土することが判明した。2003年からは高瀬克範が中心となり面的な調査が行われており、弥生時代前期並行期の集落跡の内容が徐々に明らかにされてきている（高瀬2010、高瀬編2004、2006、2007、2008、2009、高瀬・大坂2011、江豚沢遺跡調査グループ2006）。ここでは、江豚沢遺跡の2011年度発掘調査の成果について、その概略を報告する。

1. 2011年度調査の目的

2011年調査の目的は、2010年度までに発掘区北部で検出していた第5号竪穴住居跡の西側のプラン・規模を確認する点である。この目的を達成するため、04-13グリッド北側から05-13グリッド北側に幅1mのトレンチをもうけ、トレンチ内にかぎって第5号竪穴住居跡の床面まで掘削を行った。

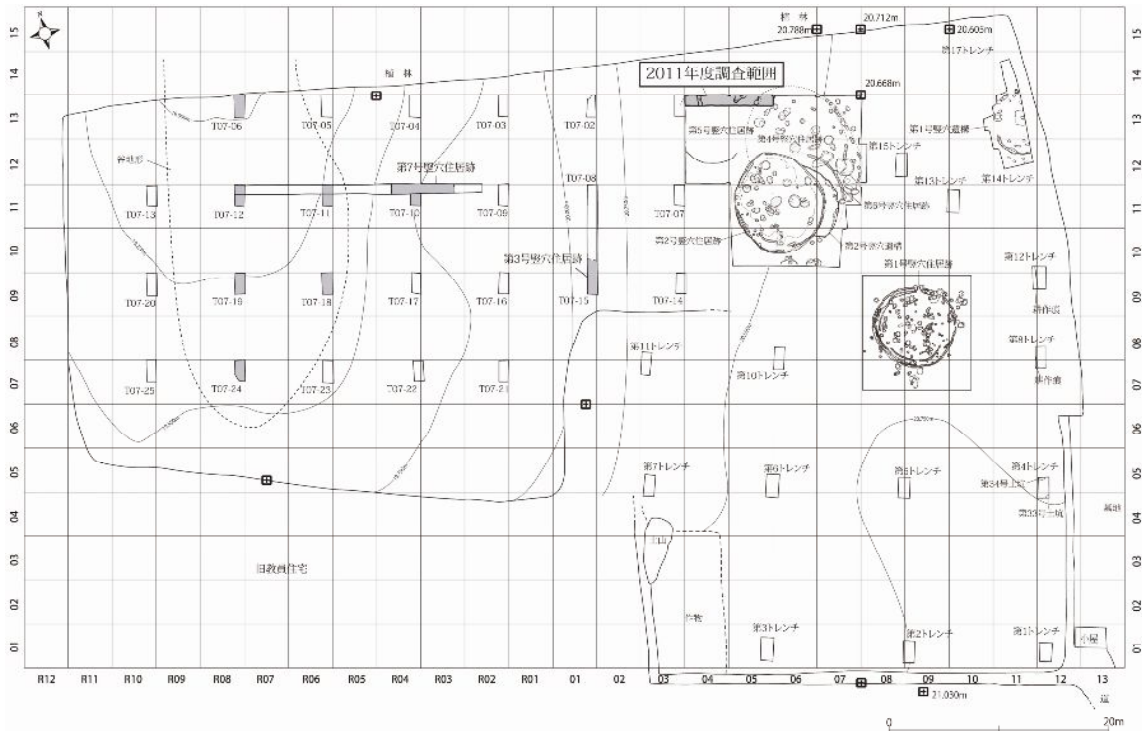
2. 検出された遺構

(1) 第5号竪穴住居跡（第2・3図）

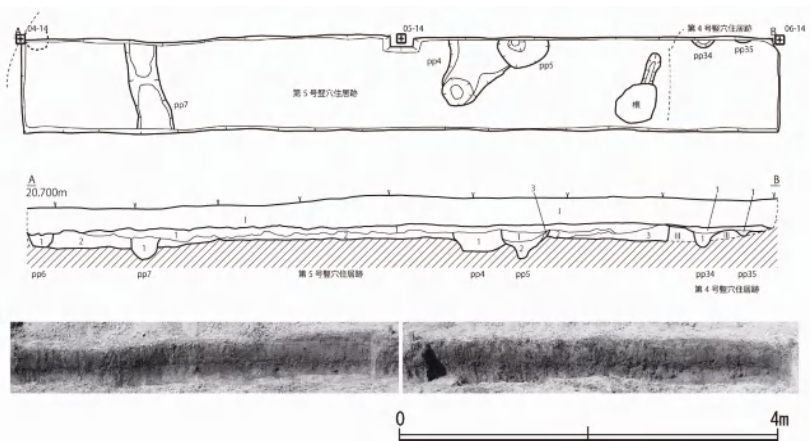
第2号竪穴住居跡の西北、第4・6号竪穴住居跡の西に位置する竪穴住居跡である。I層直下、III層中で検出され、本来の掘込面は耕作による削剥を受けている。04-12、04-13、05-12、05-13区に分布することが発掘によって確認されており、未調査



第1図 江豚沢遺跡の位置 [国土地理院発行二万五千分の一地形図「近川」を使用して作成]



第2図 江豚沢遺跡における遺構配置と2011年調査範囲



第3図 2011年度調査区平面・断面図

ではあるがこのほかにも 03-12、03-13、04-14、05-14 区に分布する可能性がきわめて高い。全体を検出していないため最終的な平面形は確認されていないが、不整楕円形もしくは卵形と推定される。調査未了のため規模も不明であるが、長径は 8m をこえると考えられる。第4号竪穴住居跡、第4号住居跡 pp18、pp19、第5号竪穴住居跡 pp4、pp5、pp6、pp7 に切られる。埋土は、下記の1~3層に分層される。

- 1層：10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 径2mm~5mm程度の炭化物粒・「ローム」粒を微量に含む。
- 2層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中 径2cm~5cm程度の暗褐色土(7.5YR3/3)をブロック状にやや多量に含む。
- 3層：10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強 径2cm~10cm程度の暗褐色土

(7.5YR4/3) をブロック状にやや多量に含む。径 5mm 程度の炭化物粒を微量に含む。

明確に柱穴と判断できる土坑はないが、竪穴住居跡と切り合い関係をもつ以下の土坑 (pp) が検出された。

[pp4] 2層上面で検出した。1層：10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 径 5mm～1cm 程度の「ローム」粒および炭化物を微量に含む。

[pp5] 2層上面で検出した。1層：10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径 3mm 程度の炭化物粒を微量に含む。2層：10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 径 5mm～1cm 程度の炭化物粒を微量に含む。3層：10YR4/4 褐色 砂質シルト やや強 しまりやや強 径 5mm～1cm 程度の「ローム」粒を微量に含む。

[pp6] 2層上面で検出した。1層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 径 5mm～1cm 程度の炭化物粒を微量に含む。

[pp7] 2層上面で検出した溝状の落ち込みである。1層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性中 しまり中 径 5mm～1cm 程度の炭化物粒を微量に含む。

05-13 グリッドでは、急角度で立ち上がる住居跡東側の壁が検出された。溝や炉は、今年度およびこれまでの発掘ではまだ検出されていない。床は、西側が数 cm から 10cm ほど低く、やや凹凸が目立つ。発掘時に確認された動植物遺存体はなかったが、フローテーションでは植物遺体が出土した（次章参照）。竪穴住居跡の時期を確定できる出土状況をしめす遺物はないが、おおむね大坂（2009）編年の八幡堂 2 群段階～八幡堂 3 群段階、従来の型式区分では大洞 A₂・A₁式から砂沢式までの土器しか出土していないので、住居の構築時期もこの時間幅のなかにおさまる可能性が高い。

(2) 第 4 号竪穴住居跡（拡張後）（第 2・3 図）

耕作により埋土の多くが失われており、大部分が他の住居跡に切られている竪穴住居跡である。2009 年にほぼ発掘済みであるが、トレンチ内の北側の断面観察で遺構西端を確認した。埋土は以下の通りである。

1層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 径 5mm～3cm 程度の「ローム」粒・炭化物粒・焼土粒を少量含む。

付属・重複土坑は下記の 2 基が検出された。

[pp34] 1層：7.5YR4/3 褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径 5mm 程度の炭化物粒をごく微量に含む。

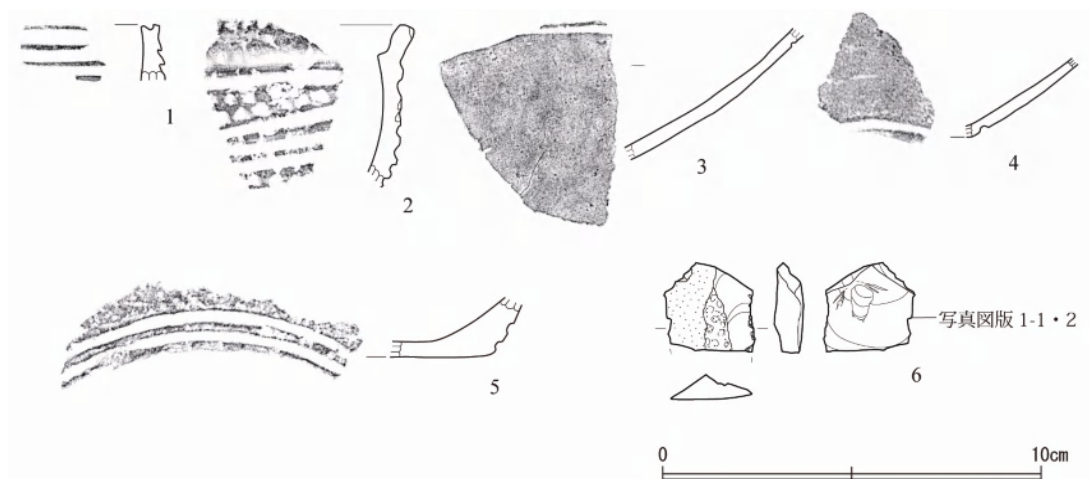
[pp35] 1層：10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強 径 2mm～5mm 程度の炭化物粒を微量に含む。

4. 検出された遺物

(1) 土器

土器は、第 5 号竪穴住居跡 1 層から 4.1g（うち図面掲載 2.8g）、同 2 層から 34.0g（うち図面掲載 34.0g）、同 pp4 の 1 層から 4.5g（うち図面掲載 4.5g）、pp7 の 1 層から 36.5g（うち図面掲載 15.5g）、表土から 51.7g（うち図面掲載 0.0g）が出土した。このうち本稿では、遺構出土の口縁部・底部破片およびその他の部位で沈線文がみられる破片のうち 3.5cm×3.5cm のゲージをくぐらないものを図示した。ただし、この基準にあてはまらないものであっても、特徴的な文様・器形などが観察できる資料を必要に応じて図示した（第 4 図）。

第 4 図 1 は、第 5 号竪穴住居跡 1 層出土の浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。精良な胎土が用いられ、表面がよく磨かれている精製土器で、口唇部にも 1 条の沈線が引かれ



第4図 出土遺物 [1・6：第5号竪穴住居跡1層、2・5：第5号竪穴住居跡2層、3：第5号竪穴住居跡 pp7 (1層) 出土、4：第5号竪穴住居跡 pp5 (1層) 出土]

ている。2は、同2層出土の鉢の口縁部破片である。口唇部には刻みが、胴部上位の文様帯には波状工字文が描かれ、無文部は刺突文で充填されている。3は、同 pp7 の1層から出土した浅鉢もしくは台付浅鉢の胴部破片である。4は、同 pp4 の1層から出土した浅鉢の底部破片である。4・5ともに胴下半部が無文の個体である。5は、同2層出土の浅鉢底部破片である。器壁の最下部に横走る沈線が2条めぐらされている。

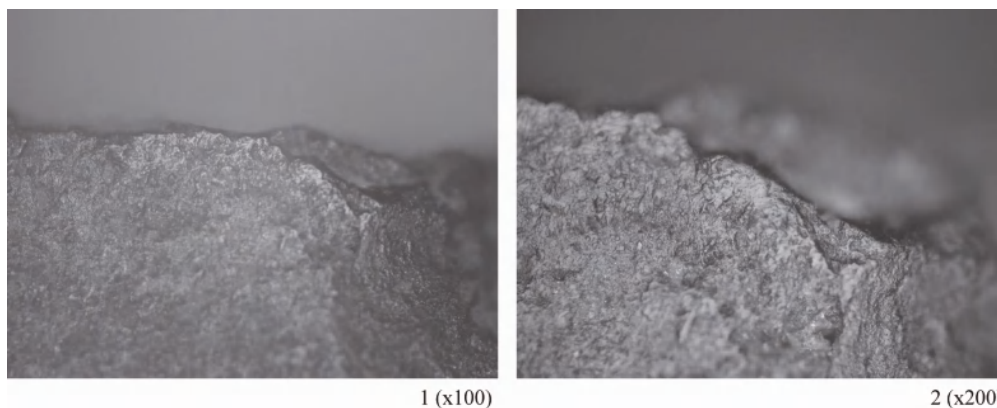
(2) 石器

石器は、第5号竪穴住居跡1層から1点(1.7g)、同3層から1点(2.6g)、同 pp4 の1層から1点(0.7g)、同 pp5 の1層から1点(4.3g)が出土した。このうち本稿では、pp5 の1層出土の微細剥離痕ある剥片を第4図6に図示した。頁岩製で背面に被熱によるハジケの痕跡が認められる。背面からみて右側の側縁に刃こぼれが観察された。

高倍率法(Keeley1977, 1981)により、本資料の使用痕分析をおこなった。資料表面の油脂をエタノールで除去したのち、同軸落射照明付き金属顕微鏡(OLYMPUS BX-FM、総合倍率100~500倍)を用いて観察し、顕微鏡に装着したデジタルカメラ(OLYMPUS CAMEDIA C-4040 ZOOM)によって必要に応じて写真撮影を行った。観察の結果、腹面側の右側縁がわずかにえぐれた箇所凸部に、表面がなめらかで断面が比較的丸みをおびている使用痕光沢面(ポリッシュ)が確認された。梶原・阿子島(1981)、阿子島(1989)による分類ではBタイプにもっとも形態学的特徴が類似しており、光沢面上の線状痕は刃縁に対して直交方向にはしっている。Bタイプ光沢はイネ科草本や木と相関性が高い使用痕光沢面であり、この石器が植物に対して搔き取りもしくは削りの動作で用いられたと推定される。使用痕光沢面の分布が非常に限定されていることから、木の搔き取り・削りに用いられた可能性が最も高いと考えられる。

(3) 植物遺体

第5号竪穴住居跡1・2層から土壌サンプルを採取し、微細な自然遺物の回収をおこなった。土壌サンプルの容量は、1層が1.0リットル、2層が0.8リットルである。0.425mmメッシュのフルイを用いてフローテーションを行った結果、1層から2個、2層から3個の酸化した植物種子が検出された(写真図版2)。いずれも一端がとがるかぶら形にちかい広卵形で、表面



写真図版1 石器使用痕の顕微鏡写真
[写真撮影位置は第4図参照、写真横幅はx100で1200 μ 、x200で600 μ]



写真図版2 出土植物遺体 [第5号竪穴住居跡2層出土]

を覆う凹みが認められる。長さは1.2mm～1.5mmで、片面の中央部に穴のあいているものもある。形態学的特徴からタデ属と同定された。

おわりに

幅1mのトレンチ調査ではあったが、第5号竪穴住居跡の東側の壁の立ち上がりがおさえられたことで、その長軸は8mをこえることがほぼ確実となった。また、これまでこの住居跡は卵形あるいは楕円形で、長軸が西北・東南方向をむく可能性を想定していたが、東北・西南方向をむいている可能性がたかまった。さらに、第4号竪穴住居跡に切られた痕跡も認められたことで、本遺跡において確認されている竪穴住居跡のなかではもっとも古いものであることも明確になった。栽培植物や動物遺体の出土はなく、具体的な時期を判断するだけの土器の出土はなかったが、今後の調査方針の策定にあたって有益な情報をえることができた。

さいごに、調査の実施にあたってお世話になった下記の方々・機関に感謝申し上げる（五十音順、敬称略）。青森県教育委員会、大坂 拓、勝木麗華、工藤せつ、坂本朋子、勢村茉莉子、中澤寛将、根岸 洋、むつ市教育委員会、村木 淳、森田賢司。

引用文献

阿子島香

1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社.

江坂輝彌

1953「青森県下北郡田名部奥内江豚沢遺跡」『貝塚』47: 218-219.

大坂 拓

2009「Ⅲ - 2.下北地域における初期弥生土器編年」安藤広道編 2009『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』(課題番号:18520589)平成 18～20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)): 113-125.

梶原 洋・阿子島香

1981「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—」『考古学雑誌』67-1: 1-36.

Keeley, L. H.

1977 The functions of paleolithic flint tools, *Scientific American*, 237-5: 108-126.

1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis*, University of Chicago Press.

高瀬克範

2010「江豚沢遺跡(2003～2009年)」『むつ市文化財調査報告』38: 17-30, むつ市教育委員会.

高瀬克範編

2004『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2003年度)』江豚沢遺跡調査グループ.

2006『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2005年度)』江豚沢遺跡調査グループ.

2007『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2006年度)』江豚沢遺跡調査グループ.

2008『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2007年度)』江豚沢遺跡調査グループ.

2009『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2008年度)』江豚沢遺跡調査グループ.

高瀬克範・大坂 拓

2011「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2010年度)」『考古学集刊』7: 63-78.

橘 善光・山本一雄

1967「青森県むつ市江豚沢遺跡調査概報(1)」『うそり』4: 17-23.

江豚沢遺跡調査グループ

2006「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報(2004年度)」『貝塚』61: 29-50.

山崎晴雄

2001「下北半島」小池一之・町田洋編『日本の海成段丘アトラス』: 26-27, 東京大学出版会.

Preliminary Report of Archaeological Excavations
at the Fugusawa Site, Mutsu City, Aomori Prefecture, Japan

Katsunori TAKASE

Graduate School of Letters, Hokkaido University

The author has carried out archaeological excavations at the Fugusawa site, Mutsu City, Aomori Prefecture since 2003. Thus far, the authors have discovered at least seven semi-subterranean residences, and completed the excavations of four semi-subterranean residences that are dated to the early stage of the Yayoi period (ca. the 4th century B.C.E. to the 3rd century B.C.E.). This paper reports the preliminary results of excavations that took place in 2011. The purpose of the 2011 campaign is to grasp the plan and the size of the semi-subterranean residence No.5. As a result of the excavation, the shape of semi-subterranean residence No.5 is oval, and its long axis is estimated to be longer than 8m. Hearth and grooves along the wall of the residence could not be detected. We found pottery fragments that were dated to the end of the Jomon period to the beginning of the Yayoi period, and the residence was also estimated to have been constructed during the period. Lithic use-wear analysis revealed that there was an informal flake used for wood-working. Five polygonum seeds are recovered by the water-flotation technique of the sediment collected in the deposit of the semi-subterranean No.5. We will continue our examinations of the formation process of the Fugusawa settlement.